遺老物語

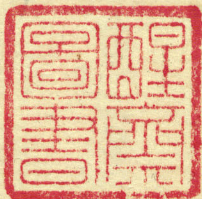


永録以来出来初之事

信長公御代之内



一殿守之起ハ永禄元年春之ことなるに尾州楽田之城を敵方より攻入しに留守の時城主之又家臣し後原中より高とくを城中に高サ二間余の壇を築其上に五間七間の矢倉を作り其中に八づしきの二階ざしきをこしらへ八幡大菩薩愛宕山権現を勧請し奉り諸神を信仰有しかりけるに其後より殿守とよばるゝなり置しに即其年と能村田の足軽敵をおひ出しひきたて此を伐国に於て殿守としたるもの今度尾張国其国の城を連とつくる所をとぞ



やう〳〵在りしかされ共大敵退出しつゝ
是ハ僧をわしきとなりとて在りし圖を寫し
よせらるゝ壇を築しいふみと其ほとりに在ちを立
とや〳〵代々其甚大に成しとハ江戸お士ヶ在
ちまりと見ゆ其體録なり

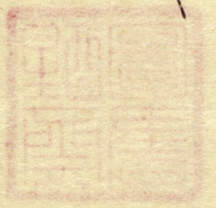
一 其國まて合戦打勝て其國を遠国の士に賜て
治めし格を以傳代なり

一 天正の比よりてハ代々天下ニ至る判をかましつゝ云
より舞申まて御申しなり

一 敵の國を朱印にて相傾けること

一 合戦の格昔を少からざと記ありし

一 士の氣味を真にたしなみしこと



一 其まゝ取ちやつさ出しけり

一 京都地子町よりの御赦免ありつゝ爲しけれ
但五條家は並足御尤なるとは在来りにありしと

一 國々は関を破御請ありけり

一 鉄炮

一 石火矢 是ハ瀧川方を相望一壘打初む

一 諸々見るもの成出しハ信長より祖父自然と
御代ニ在る從分ゆかしとまてよりて自然之大子織田
備後守殿と今川義元と三州小豆坂にして舍弟孫三郎
とのと大将と在向合戦ありし時七本鎗といふ事初
りしなり是ハ相より名目とよ〳〵罷出し

一 明智に於て帰し合て討死ありけり 於て一書鑑にかくる
丹溪流醫師なる休意三世孫を関東にて
得しなるに廣めしなり
一 信長公信忠卿昵近之士歯に加ると付 書かれたる
なり
一 せきだ
或曰宗易氏せきだを製始しといふハ不識
に業也 信長公に御代 信臣ハせきだ昵近ハ書き
来しを御覧ありしに依て せきだ為知りしや
他の諸人を書かれたも有りしや
出以前
一 菅や九左衛門 織田酒造丞 二子也 太子息 覚悟

共に於て二条討死覚悟 十四歳 為に張り有しや
長谷川竹 同様に覚え 御供は役目御密に
て候なるに 御供果し時 十八
矢部善七 酒造丞と云し也 此三人を信長公御家
に召仕けり
堀久太郎 赤鍋庄屋にて侍所なりし
下又仙千世 尾州小幡に在し者 若年也 有名
にて討死 此時三十一歳なり
大津傳十郎 尾州北方に住居 柔術 御番野
にて 政事に於て二條にて御供
森乱 此舎弟 力丸 坊丸 何も森三左衛門子
息 此外三人を於二條討死

一 柿衣庵　御本字
きちやにつき上意　出来和らしハ天正は和泉州境
の津に向の道祢ト云ニロヒスキ屋敷セハウニテ
宗を一ヶ処不成人キヤノヤヲヲキリヤフリ所ヲ茶とせり

一 秀吉の御代とかや
一 筆物　是ハ秀吉大きん成馬に乗流ふて出
自由によつて此をせり　是より　としきんて
をやり出しなり
一 爽若　是ハ秀吉公に小脇指の頭に家来ふ流出
二出し候ゆき
一 屋形号ゝ諸侍に免しける
一 金銭銀銭　是ハ於戦場御褒美なる也
一 かゝとを白羽たり
一 兼しく千枚ゝ銅
一 武家より関白職と成ること
一 支国の御出されし時　海上始し事と明なき　旧ると

入なり

一 京極御幸町通なる　出すき等給様に気ニ

茶好者をさそやり

なきにて入なり

一 諸侯大夫と一段にわけて因名をし給ふと

一 洛中を堀の囲ニ築 役山を築て 諸人安住せしと

一 ?生囲ニかこゐとなり 諸侯等に与へけるなり

是ハ蜂谷か様を始て 知多(?)方と戦京にて

兵をも不取んとつかはし 侍らしとらしとせさる

一 自ら神といはれ(?)給ふ

一 寺々とかゝつけ寺町と号し 洛中にあり

ありしこと

一 本願寺門跡と二つに分し賜ふと

一 山城の便りに隠れ 船入と堀わし 其

是ハ伏見と城に船入にしたるへきか

高麗并 退治し給ふ

一 千本枝(?) 是ハ明らに入給ひしなり

ぬけとたん 一 給ひ止宿

一 そいふる 是ハ千葉ほかにてするや

一 国中に屋中并に本家之 大臣号并 関白子大坂伏見へ

よひをらせしなり

一 たいらすけ門跡御寵愛にて南楽を給ひ

ありくらなり

一 寸見者と云名なり

一関白なとゝ云者御子等領中と車を添し
かゝしけるの身を擲生害しける
一六十六余州検地しける
一高野山まて破しける
一其後ハ女房等女房と鎮しける
一日本国以来公職として公儀御知行取当
を招集るニヲ拾地すると悪りハキトリ金銀ノ分銅ニシ
タマフ事此名職ヲ昔ハ持たる人老テも是ニテ世ノ
樂ニ終ランと思ヒ故貴キ欲ニ至テ七ノ気味自然ニキレイに
侍りしか今ハ此島無く於老テハ金銀ヨリ外ハ身ヲ樂マニ
キスキト高下共ニ思ニ依テ人ニハキ出来人から自然ニヲこり
成下りしナリ

出頭衆
増田右衛門尉　　石田治部少輔
名束大蔵大輔　　師法印
香蔵主

秀次公御代之内

一 謡抄

一 五山聯句之會再興之事

一 たえし物語之仕出されけり

きりつゝ釘にて網をはりける

一 昔より小池備後守源と秀次公之小性小川伊作

召つれられ小川二丈あり 此小池ハ高安山堺の塚たり

あまたのしあれよるところ信長公之家臣ぬぎて抱へられ

しかるにたゞし物は鵜飼ハあまたき加賀守と云しもの

餘手刀を求め出しさしぬけあまりにしく思ひ人と喧嘩に

埋しを夜に入掘出し切て見るに其刀とる所いさぎよし

付き

一ひゑの山ハ殺生禁断にて院之御制禁
をも鹿狩にて
出羽氏
熊谷大膳亮　粟野甚之助
駒井中務少輔　吉田意庵
宮川如心斎

家康の御代より
一東鑑ほしき物と世にもてはやせしより
一武家にも学文はやり出たる
一金にも小判目を歩
一京都は両之町
一米穀も直にあがる
一銀山にはやり出したる
一太平記之便利
但此書ハ寺沢志摩守九州にて信人名和宗之
より得し法華法師大鷹院にて御存てより
廣くなれり
一かぶきをどり

一 小心性ニ而 不器用と見立大身ニならぬ事
松平式部大輔 井伊兵部少輔等
大坂御紙 評曰 此両人とも至て悪しく 尤善とせん
然れとも害は種類ありて 或問 不肖者に何か譜代の後世
此格を善とし 小心性ニ而 甚以宜しく 其後莫
太き気ありとも 国政ををも任せんに 其人金の為
とハき世間はさまざまなりける やうに見えて 係ふつき
こしかれ此輩は国を乱す毒虫なり

一 逆慮勝なる 性質と見える 係議をも文ニ用ひなる
ものを臣と 総侍議格なる
評曰 本多佐渡守ごとき 此人千一世を 欲して

一 廣大なる思慮なしや 眼ハ係ぬるけれしなる
天下の国の合戦ニおゐて 勝て 古傳出来と 此国ことし
伴りて 旧臣の内 一人を 国さしおはしなり
治部少輔礼より 二十ヶ年 と過て 寛永十年
家康公 御出陣まして 酒井讃岐守ニ被国を
恩賜し給ひき 其御事ニ係神て 国をゝに任し
より 本多佐渡守小田原ニ而 御加増として六万石
賜り 即東国ニ探代とし 給ふへき 御内證し
とも 国持としてなり 此人定気厚なりし 旧国
ニ諫議を文ニ用ひなり 給ひまとは後ちつつき
土井大炊助と云此者 文に用ひ 給ふて 後天下泰平
なり 此格 後代をとなへきか

一寺町ハ東賀茂川の流をうけて和とよばるなり
一風俗ゑいやうにたゞしく扇も花やか
一長袖ハ武士の氣をもかよはざるなり
一なつかしきより劍なり
本多佐州　井伊兵部少
安藤讃岐守
大工大和守　後藤庄三郎
細工永仁
十四屋宗伍　茶屋四郎次郎

一二条ノ御城ヘ　寛永三年　行幸なしたまひ代始
なる花麗をつくしけり
一摂家　親王家　大臣家之衆　不残江戸へ御見廻
諸下向ありて　不残諸士衆　日光へ御社参之
ありて　御下向ありしなり
一寛永九年　台徳院殿御逝去
一諸大名衆并公家衆中へ寛永十年金銀為下
いや五十万枚下されしとなり
一御旗本衆小身なる衆八百人并に御加増下されしや
一度ニ三十万石下されしや
一江戸東叡山ニ先年建立　二月ハ中小釋菜之祭

し以宗民部卿法印道春先生執行ある

一 叡山 根本中堂 大講堂 高野山 大塔
知恩院増上寺 御先祖菩提之御為に御造営
并所々也

一 京中の町人共に銀子五千貫目 御恩賜 但し
寛永十一年 御上洛為御祝儀下されけり

一 大坂境 奈良 三ヶ所ハ 地子永代 御赦免 同十日

一 江戸町人中へも銀子被下 御恩賜

一 御譜代家之内 貧窮なる面々あつれに随ひて 小判
千両借中共ハ 二千両かし与へられて 宣しく時武人
借金然るに返しし 可有所生やとか申し

ゆるやとよ 借用之小判千両有しが 千両かし
あまり及返弁 所々生じ あるかうしき 此ハ第一の慈悲
の積善なしとて 宣しくて 二千両かし与へ 誠に極て
一度に二十万両かしとらせや
評日本記之内に や寛大の量なる御慈悲也
り併や ...
みたり

一 寛永戊子之冬 大政大臣に任じ給ふ 雖有勅令
于然固辞す

一 仙洞に七千石御進上有しけり

一 寛永十二年 月に江戸騒しく 地震せしに
将軍様出ずして 御出御とりしまりすや 左御るかと

と申出んと　各申合候て有候ゆへと申事也
其上御感之由しまゝ宜しやうハ日来恩顧之
地ほとし候つるゆゑ　西様之所領帰之御厚恩
候ふハ彼を割し候之由目ニ見んと　とかく候ニ
ニ地震なとニ論なき　一命をすてんとしける勇
士也是も不及あらハ候ハされハ　向後地震之時ハ
志之記録ともなれ申違なく忠義之事候へし
りけれ共然也　並なき程を残し候ぬへきもの也
所蔵ともし御之事共しく可申候と日記に記し
候ひんとなり　猶て御中御存し叙候して地震
之時御心ねあらまし果てもやあらんと存も候
旦御意之大事ニ御座候と二つ三つしる由ニ　これ

取へき事ニ候出なり
　評曰是も又不浅御事なり
一　近年米穀甚高直ニ成り其より　諸人以之外
難儀ニ候あるよし申に及あるましく候とありしか御蔵
入方莫太之費ニ成ぬるも是其之比時分ニ扶持
へき事なれは役人ニも申付しや
一　久之不変術とも御用相之事ニ候せ成候事

書面之法ノ所
大納言殿　大納言殿　中納言殿　諸侯之衆
伊達中納言殿　加賀中納言殿　越後仙台也殿　諸侯之衆　形ノ卿法ハ不書
御判

右之通り
御譜代衆へ面と
御譜代衆之面々

右はしかし彼宗対馬守と柳川豊前守ハ
於獄官と面々下知して裁許不変断すると不便ニ

被思召御直ニ聞させられ廉直ニ而御仕付之
対馬守安堵被され柳川ハ津軽へ流罪豊前守
ら内十左衛門といふ者某人ハ翌日十三日ニ御成敗ニ
せまりしなり此格一而て日本四方共逝心閉結へ
き是此格末代ニとりてありける大より曲事
なる小人は為ニハ能破なり寛永十二年三月十一日十
二日之事なり
儒学とやり宋朝元朝之儒者制作之書籍皆之
説と委林氏道春先生時之経く

右浦菴曾孫小瀬復菴藏書

日下部景衡識

蝦夷乱紀事　通事勘右衛門下

蝦夷嶋ハ其地廣しといへとも嶋の中随山にて端居ホの
ミ人住めり上世ハ此嶋の濱のミに夷人化生せり
食物乏しきハ物とてなかりしに夢中一つの舟揖を得
て此揖にして大海とかきさくるに魚あると得けるとゆへ
足しろむるはなしくれにし海中とかきさくるに白水上に
うかミてたわむれり鯡のうミ出ることよりて名とせり
其初て化生せしものは今の江刺（アサシ）うれ夷宮と申す
ハ彼先祖の妹背と申すハ彼若女と何かあるへし
ありとも鯡のあるをもかなしくは白浪といへり
そあり是より子孫生じて夷也と四ツ呼
こととなりけるに其後国の住人武田か子孫住居

後号蠣崎若狭守
始て此嶋に渡り来て　其地は和人とうちまじりて之
此国勝山といふところに城郭をかまへて居住ありて子孫
世にさかえけれども日本の風俗を守りて
年月の移りゆくに　其村里の名なども定めける　其余の
蝦夷地は不毛の地にて居住すること能はず
其風俗は目じるしには天骨つよくすこぶる頑
長き髪をのばし甚だ形獣のごとし　住所は山海にそひて
険阻とする　されば鹿をとるを業とし　ゆへに陸地
のごとく漁猟をもて其業とし　其地産物なければ
貢物を納ること及ばず　獣の皮類の魚などといふものを
のせきて交易し財物をあつめもうくる
なく人倫の道をもしらず　されども父子兄弟とあひまもり

より信廣より五代の孫蠣崎民部大輔慶廣が代に及
び文禄三年八月秀吉公関白にて出仕して蝦夷人支配の
ことを仰かうむりて松前の地に居住してまつ
まへ伊豆守と申す　これよりして我国の人此嶋に来り
住するもの甚数多はなりにけり　其後慶廣より五代
志摩守矩廣相続ありし時（矩廣十歳なりし）
蝦夷にはしびちやりといふ所に志やくしやいんといふもの
あり又志やくしやいんといふもの　骨格たくましく力量人に
あまりすぐれたれども党を立て大きにおごりて蝦夷ら
を従へ其に属するしびちやり川とあるなかにて城郭を構
へ其後此しびちやり山といふ所に黄金ある
くせしかれば我国の人つねにゆきかひ金をとる

ものもあつまりて居けるが其中に当国仙北の
庄大夫といひし金持ありし彼がやくせんが智舞とぞなり
悪くせんを始めとして松前侍をうち滅し残る
国往来の高船をとりてそれが為に何ともせんとて深く
ことのほか鬼のごとしといふものありける又鬼べしとてみけるも力
浅ましき其の身悩ませる事共なりしかばありし昔源義経此島
に渡り給ひし時蝦夷に居住ありて云ひ伝へてありし
此所より出しより後くこれを恐れくるとや申しとぞ
旅人をいれて(江戸より出し人を江戸者と申すなり)
此鬼ひしその所よりおし
其の御事を云ふ此国は方人とありけるがやく
せんが法を沙汰して(いふ)ことしてかれを討ちけるが
松前侍は昔恩に報ひまゐらせんと思ひそれは(まこと)

その用意もしたりけるとやくせんがくと侍ども
やがて人数を催してさうしなせ絶跡にて年を経
さればこそかれはたびたやり山には今ほどの二百人ほど
が首級みて文字ふといひしものやくせんがすみし
城は下たびたやり川と名づけて(此川の名今間にあり)只今百間ばかり
りみち塔と築きそれは内に家作りして居住せし道る
馬をたてて庫二十ばかりこれ松前の要用なる事あり
て文字ふ所へゆきむかしに鬼城とて又入り来たり
とも報がかたく要害はこよう三里が程と名づけ
て勇力をたのみてやくせんとかたんしまひ
けるかもつ事一人とうましてよゆくとやくせん
性なりこれをもって天のあたへ給はぬを恨みける

限りなく二百餘人をうち取りしかども猶川を越し
渡り重ねて惣勢をとりこめし鬼へとてよせてせめや
うなかてに鐵炮うちかけ出ぬことをあらそひけれども火をともさん
て一人もあまさぬ次第なりしにかの左近る内にハ
文四郎ハ奥方と娘をはしらせて十四人のはなれず鬼丸が父
四郎にむかひていひけるハ我一人はつなぎとめて人をとらし
めてむかふものハ打ちぬすみ給ふべきへんなくはずし成りと下すべし
信じまいらせんかたなく是で何かも人あらじとなやすべき後ぶ
りて我城にもどらんずらんとあやしとそうしのかたなしとて
文四郎が縁をとかりて急ぎ出で四五間八尺ばかりをはねこえ
より布子をぬぎてみつけし次第と陪き所をかいゆうとし
入れしてかおもとしけるに敵にむかひて夢

に鬼丸ここにかくれたる時ハ見ともあらしくさら女あるものの
ともしたがひて人をとどめ悦きうちにすずしと
よきりけれも鬼丸はみね縁とかけすて
相模守あて行かりし太刀をとりてうしろさまハ
いかにと隠していれ命をとりかけるとて
文四郎はあやうけに大きなる桃とかけて戸をたて
しかれに二三うちられハ敵も見ものとも叶はず
おぬるとてきてありけるによきに一方と
ともひきてもつて出つれどもやいなや大力に
されハ鬼ガ中を躍りこえて見こえてあとへ打ちはらひ
おもひも出でけしかるをうけつきにしける鏡の足
はづつると隠しせられて射方つられ出たるものならハ

一所ばかりとすゝみてかゝれぬ事なれは命をいたされけま
るひとあまたれてちり浮しかは一人まかりたゞ矢を
矢にまはさらる程々つまり 射て佐に其身
とゞまりてかゝり時候に多くハ鬼べが下人長持の中に
かくしをきける又みな入置て鬼べそのふた時
下部一人とゞしたり出さるけれども天井は上大床は下
また人をかくれてさがしけれども其人見えず
とて立帰りしが其なかひとりは蝦夷に帰りて
あまた日にゆる長持ここ覚束なかりけるを其は何と
いはけてつかはさるゝにも志やせんとて事つまり
いりやすらむ見るうちに志やせんこれと見て
まり見しておかれは道あるべき追放つ也し

とて出てふつ是歳寛文九年己酉ふうさ目し
八月松前に商人ゐとりくし船六十艘でかり小
それの常年ゐるともあまたなきれは東
嶋はうふとりもしかにまかり船は内三十艘ばかり
しひろりはるかりに渡さりると志やせんに屋し
蝦夷ととも多く出むらに常手は殊多く出むと見れ價ハ
いりわる事とて其に何とせずしてところに船中
殊高物ともとりゆき夜すでにうけ船中へ立は
ひ又四人ものがれ其ほとにつかれぬ遍く一て
みなゝ其ひとかにまゝ帰る事を四五人ありれ出て
陸よ上りてかしこにかくれけるには寛文十年六月に
至て松前の方へ帰りこれりさき四月の比須

方の蝦夷ともと此よしを松前へ告しらせ佐藤権左衛門
蝦夷ともかゝる所の子細をとゝけて同き月廿日を
おもて副て江戸に注進をとゝき同き月松前八左衛門作と
うけてもてなりかしこ松前より家人蠣崎作左衛門
三百人をひきゐて夷地へむかひしに海上より川をも
して戦をと尾しらみにえやしせんとするものなれ
ども二千人あまりちやうまちんと犬ねらひして攻上り
と寄しに蠣崎やうやうらんぬけ城とかまへ矢合
へと上け此度は金ならずして大集まりせい百万人えて
てこもる此内松前にて聞えられ佐藤権左衛門年七十に
五騎ありてよりしげる男也千騎ある三十人松前勝右衛門十人新井田瀬兵衛
百三十人と先陣して後陣には松前八左衛門の勢

陣とり城中への矢合せて其家人並びに頭をは
けかくして出のき塀より城中をやかんとするに
かねて次らんぬいの川を堀て溝に川水をぞたゝへ六七尺
御さ鉄炮二三挺丁と合せてあまし合わすかに急
そ百余人て所に弓ととらすれねらうさきつる大き
夷次いますとして毒矢と射ることあれとし源
其余皆し毒矢とかく定めるともは鏃をさき
うりうれ頭に射矢うしかしぬれ一命もなく死
よりて其時とることも戦をとらへてんともつ
みに鉄炮を打ちかけ城中にまけこもるから
たとされしかれともはかし自みに向きなげく
まけ引しかはこれ共とともに乃

御方様をつゝむ息をたすめくんぬいつとかつ
まかり代たると先陣し二陣佐藤為三左ん
勝之助四陣佐藤為五陣八太郎錢ちしとみげゆ
数とおひらふくんぬいより八九りとい
ふそしま蝦つといふ所にありて山々み
こもりと聞しかは彼やまふとしよせ御
くらうと川路炮となまつふ及びす攻とそ
於くて一陣はせいかり貝を吹すとまち
て蝦夷ともと濱辺ふ追出し一人もあまさ任
うちとらんと議定して所々におこしを
さし出し相図はかひを吹させ攻のぼる
蝦夷とともかふてしとやとまもりけむ為り

くり川〔山上にある川の名なり〕の水は中ふ黒み〔海中より熟なり〕はな入る
こしふ籠へ水底とくりゆき川ふてけ
うせ能るものゝうふ十六人八太郎かふふか
とる〔山のかりロまてそこゝなし／とらふ〕捨たらふれとそ彼むころさ
まくらけ我とりふ不ありけれ打ちかへしとそ
いのちをとらまけ縄ととき案内ものとなし
まけゆく敵を追かけゆかしてとゝ通つ
みぬやしやまん佐といふ大河を通りて夷は
首を四十人舟ととそしらむらいれ岸より
さよせて其せい手負人あまたむかえより捨太郎
これをらんそ通る恭ちつとをらしみんちいふ
もそうらひ彼やり系蹴人に奪しそ図し

ゆひしるし御たゝ鉄炮を携へきたる岩を
よちのほりたりしをぬきて立あかり大
きはけていひけるハかのれら狐狸の属にて
天地せめともかゝりみれは御鉄砲仕へんと
するふうりて江戸よりの御大将松平ハ左衛門
殿には御せんを川くしそられぬものにまふ
ありとのほりて鉾をもちて奴原大勢入りみたれ
かくるとももとよりふさうしいろし
みけるまて一人をしふすけむうちころさし
めん御詫やとしきんとひらかみして将氣人まち
て氣たるあらそ某いかにも中語りそてその命をたすけ
たし先にいけれしぬ事もきみやふくひ切くるし

とめし中某か中郎さあり御鉄砲にさしむけしや
つきしハきおきつゝ射る所は家の本は人ともに
為犯ふらるましきこゝと討ても試しみしとのふまふ
胸板をたゝきてよきつうちうち表ともこれをきかし
より家国はいきさわひふともれよふ江戸ゆりして
多くの御勢むかいしとさしはさめる大手勢まさし
やがて鎧をぬぎ掛刀をぬきすてて首領四十人舟を艘かへ
のり将人てあまりて氣かまり権左衛門西にて此所に氣ら
より某いかにと頭かしし一人をところをもてあるへかれ
ところをもてとゝめか中とて此すしをとゝめられハ左衛門か
ゆきてみしく謀しひけよう降参をいはんかの幕をそし
うちとらすし汝ハ将人たちを川くしえんめんひれ伏と

まるけしといひし六條判官五十六人はうけられたり
兄にうそくんぬるに川端すかへしけるかゝいふまゝより
出来る也鰕責に三郎殿人は中に待うけて立まへ
おしとゞめ作りける條の物につこれをさし小ゆるき所にても
のがりみくさぬ京にありさふかふるまれば京の
うけれたをりくして通る所とうきまるくしいのち惜
しさ坂東武者人に負けんにいかなるいのちとはすまく
けとき汝中せし下りりとこらふにいひし六一統
と射るにも及ばれども皆平伏して通したり西は
刹の神にはくんぬいは端に浮きにけりかくて六條の
と姫として御前は三位殿人はのりすそたる
舟岡とよう迎ふて舟岡やまへをつと遠り添ふやつ京

追ちらし十六人とうちとりて五人の首をば取給ひけ
さき大わらちりちやまんの首をとらせてその日は
くんぬひの端に押入まいて鰕責のものどもは日中
に一度物くらふつくりてくふ色さ物かき時は
六日とゝめれども飢と苦しむる何かも此度は
戦に我国は人粮こそしして飢てくるしむもの多
かりきされば汝が首とあつまりけてまつ一條で
條の若九人とりくてうちとる二人と諸人
方は物うちつぎてくんぬつと申しくる御前はあ
とをとめてられしとうちてゆく條のつこかこ
の者たくと時念させたてうかをのの案内させ相模
かうもち人々ふみあひき殿ふつとの川もきゝるゝと

とりハ家ニ伝へかしこみハ多くハ蝦夷集りすむ所ぞ
さやくせんハ五六ちりハ一りほとゝあるそうり此所よ
ともとしく皆ふびきさうひられハさひちやりより
うげハ一里ハかりとあそしびとくといふ所にゆ
舎ありども居住とよふ四五ツありといふ陣とと
りてすまやかふ 隠れ具ども皆とりまかず来り
ざらしむ 奴等ハ一人をうすく 面りしますとさひちやり
ぬ夷九ふ下知しられむ支ホ大きふをとられとなのき
すふ次ハやともちもとひてうち取 陣屋と
住り出せしかとに格太郎 面そ かしこふ陣とうじ
舎く せんハ許ニ役とくそ 格太郎これも共に
ハうりるの決せるきこと 待へさるべしむその知

まやゆく 面紀文命借しくは すみやかふられ やまた
るべき急ぎ度道ふくと黄色ぶしと いひつふしられ
さやくせんも案ニし 取急ぎしてや ともいかひまみ
面ふられく 集りしとうへて 六七十人ハかりに
具足きせ弓矢ともたせて 夷国の人をしてみちの
案内しとは かみをかり と従にして 出ふる手形 おとハ十筑
ぞかりふるの濱のほとりくまり 居て さやく
せんこれまて集りしを役して中より 格太郎これを
聞きと帰り 村の道より 他の国とゆす ものを役して
みくさぬ等の あつきる ところに 役人のあつまりあは 鎧と
めつさら 矢とすてしと 集りくられ一人と残らず
せめころされしくさとのかれて すきたちに城中ふ帰らず

いひきかすへきこともあれハ志やくせんへの事ハ頼りとりをかせ
といひけれハ甘輝とぬきうち矢とすれやれ楼門
の上より来る楼門もみつから刀とぬきかけて
よらハ寄て唐人と能々さて我のものを
来かゝつてある上ハんやまてとりへかしとて一つに
忍をさし揚坂すゝめて後志やくせんをむかいていふ
汝ヶ罪科許し汝ヶ子孫ハ一子及をまつ汝は
くみせし身にも一人もゆるさかたき志かりといへ
とも隣人に気はられハ我も此侍しかいを出しあらま我
いらんして深々命と申侍て帰すまでよいひれ
ハいのちとたすけ侍らつんそハなかふか宝を得とらへさ
とも志も七ケをつくるまきまゐりしたん我んむしつて

あといふ彼国の宝とき千色と城中より寄
て濱端に清みかきね楼衛彼のものの中を撰ひて
公右衛門をとらせときも甚雑ハ物よりかゝれそりかへて
出すけしとて二右衛門をはかへすこれハ後侍七郎兵衛
るへきかとそのみ此列とうへしてかれくと城中に迎ア
ましきためとそ迎へらるかゝもしかとふ楼衛門文志やく
せんかゝもらひて清しあひれとの公右衛門をとしめつれハ
和藤にとらせハすゝみ調ひし甲冑ハ此のちすいり
すけ深々命いきぬ旅ひの酒清らけしとて金
りの小袖ふむ久いれ清酒二樽濁酒二樽各三斗入
とゝもいふと贈く首級二十五人あ?に二人あるとハ老人の妻なり
そくまり君くにはしらうゆれともハ城中ハ滿こ

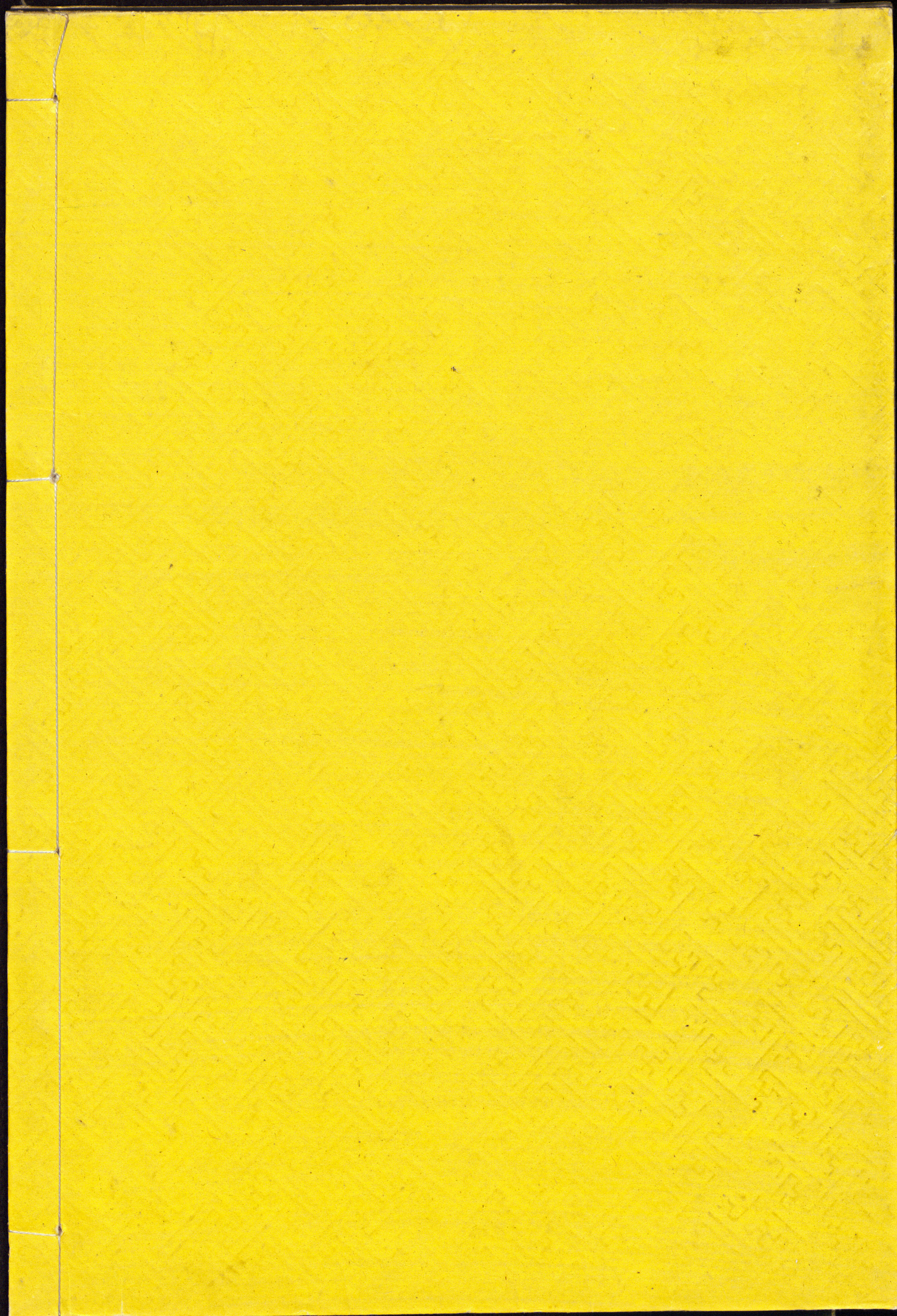
つかはすへき由にてかくてまかりけるを
りつ夫三人ちやくせんにゝここに難し不審にしてこゝ
いのちはとかくありしをともなひし実とのとも出し
めれいかれとるのせと日しく　せんるもいましとて
検校の院に孫りとしけるかくて検校は御方検校の
の侍従によりて　験検とあらせて御事なりとて二十
日にてかの月日かくれそのてむとしふ此つき今より
の御事とうちかこむ検校の院にありあめのに三人を更た
さて世にありあらう御方みせいある人々すへきるに五百人
の料は数かしくとみえて心得ぬるにやをもひけ
むそんかしくとのふちかつきてるの由をとひ
けるに人々和儀る御ひ成るは御中に出へ

りあふみまりて役所の公事あるへき料にさらにゐ
と答られとも様に得ぬありさ候はゝ赤ぬまてとも
ともかくもありりるの後侍のみせいは治共てれ
嬉しきとおもひけるにすましことのいはしと
ひしめくわとふそしては密に月とくりてみけ
出ぬまゝれすけかいけされかてんとしては事た
恐りくみてまつて事さるとよる出實として検校の
さし又は泥させとん
ちかつみあまへ八九三つもさきさしとにけて
首帳に出由と注しける　御覽てのちまれすけ
いさゝれぬり　ちやくせんの兄弟三人ちやく兄弟
とかんていとふに兵部とちとけしとふ笑ゝ酒に
被伏しけるその中にちとけしいつれに孤は汝さしく
みえのくしかうるくつきこしくとちやくけにとりてけ

うせぬ御とかめには すてにかねてより小や二重三重
みうちかこみて 時をかへあらためて又起はなし
数程ひしかとも 又なかれはうかれける者ともも
起きなとより此方と申けると見えて格んの戦をたて
かりてさるときなさき明まいとおしはかりし大音にの
者りてぶしく成してうかれけり その体は首にあみ
をこにも九七人ととらへ 小や小穴とうけて焼
ころし給ふ者やせんの殺をとげ ずんと小さりかたに
そはうり斬ることも六寸ハかりのかハかさりがり
御さるものとれをきらへてまちしく 者はちきや せんのさる
かとしよ城中には者ども城は落なせ給ひし
ものとも焼殺して御ことは皆ともくんぬいとはて

ゆるしなとせしかなと 者やせんの宗門のともから修人あと
とあらひて逃かくる御方をたつねてかくし大炮をもつて
殺さるゝやうすめ 仙台には屋敷ともかこみとりて
焼殺しさる者をしは国々御方にてらされし 蝦夷
首領十六人をいけとりて 松前まて引ゆき 禁獄す
又西国にはさまさと 蝦夷に九百日余女子七人を侍
大将としたる人は磔とさしむけ 者ゝ鉄砲にて及て
アしして蝦夷あまたくわ 降参すかくて八九人ま系
ふとしまり 両度に二寺ふして 江戸にのほり息
男三人を引具せしが 松前の城にはたゝかひとききて 蝦
夷の地にては其者どもをむかへとりき 鬼ともしたかへつゝ
不残ものゝ六十人 年に屋せしをいくされ ものどもと

二千人ほやくせんの石つみにあれ二百餘人なのほかに
属せし嶋々は我朝の数万人かくしあたし我朝の首領
ありしかども和蘭船は井の人も行あびきたるばかり
あそし松前家にてはその一人をも殺しけることあたはず
此時津軽よりうしろ坂あめあるにて侍大将一人その勢五百をひきいて松前
をさし懸る又八人ほど江戸と弁ずるし時つきしきらい浪人にも仕官をとも
おはりに松前をそえて蝦夷ノ地にはりつれども南部津軽の領主も召抱をとうぬ
狼烟をあげるさしむくべしとそのあと海のおもてにまもると定て又江戸ニ注
進アへき旅卿小屋とて一里に一ッて海辺は領主らしくおかやとらえて人を置
くと云云




H+K 2
GretagMacbeth™ ColorChecker Color Rendition Chart
15.01.2002